

# 大阪府立水産試験場・視察レポート

2/16（金）、毎年8月に行っている「稚魚放流事業」のチヌの産まれ故郷、多奈川水産試験場へ視察に行ってきました。現地到着後、試験場の主任研究員・鍋島さんが迎えてくれました。簡単な挨拶を済まして早速、鍋島さんの話しと各施設の見学に入りました。

**現在この施設では**主に、アコウ、ヒラメ、オニオコゼ、クロダイ、ホシガレイなど多魚種にわたって、研究と生産をしています。その中でチヌの生産は、親魚養成、採卵、稚魚の飼育、中間育成と言う手順で行われ、出荷されていきます。現在の親魚は愛媛県産で、**50cm** はあろうか立派なチヌが泳いでいました。**採卵に至るまでは**、自然界と同じように、3月頃より一週間に1度ずつ水温を上げていき、17度くらいになるように産卵期を人為的に調整し、産卵行動を促がします。産卵後、生後2年くらいまではすべて雄で、その後雌雄両性となり、3年後くらいから雄に成る物と雌に成る物に別れていきます。雄はエラ周辺が黒く、雌は銀色であると教えていただきました。特に、春の産卵時期はアピールするため、雄のエラ周辺が黒くなるそうです。産卵行動は夕方から夜にかけて行われ、チヌの卵は分離浮性卵と言って、卵が一粒ずつ離れていて、直系約**0.8mm**、海面に浮かんでいます。ふ化は、産卵の翌々日にすべてふ化し、3日目くらいより口が開いて、エサを食べだします。この施設では、各魚種のエサとして「ワムシ」と言う動物プランクトンを生産しており、それを稚魚に1ヶ月ほど与えます。その後は、配合飼料を与え**5cm** になるまで飼育し、出荷します。**大きさは**、ふ化直後が**2.5mm**、2週間で**6mm**、35日で**15mm**、100日で**5cm**、1年で**10cm**、3年で**30cm** と推移していくそうです。

**施設ではチヌにタグを付けて**、回遊範囲なども調査したそうだが、湾奥の浅い場所で放流すると、その場に居着くようで、逆に、港の外の深い場所に放流すると、遠く淡路島でタグ付きのチヌが見つかったそうです。またタグを打つのも、筋肉の収縮でその部分が広がってきてばい菌が入りやすくなり、病死してしまうこともあるそうで、タグを打つのはあまり好ましくないようです。

**湾奥の釣り場でたまに見られる奇形魚などは**、海の汚染が関係しているのではなく、幼少期の骨折などでケガをして、そうなってしまうのがほとんどだそうです。ちなみに、大阪湾のダイオキシンなどの検出量は、特に「神崎川」河口で見られる以外、湾に入ってしまうと検出できないほど微量で、近年の大阪湾は水質もいいそうです。

**鍋島さんが言うには**、昨今の大阪湾各波止でチヌの数、良型がよく釣れるようになったのは、**25年**、**20万匹**放流を続けてきた成果がやはり大きいだろうと言う事でした。